

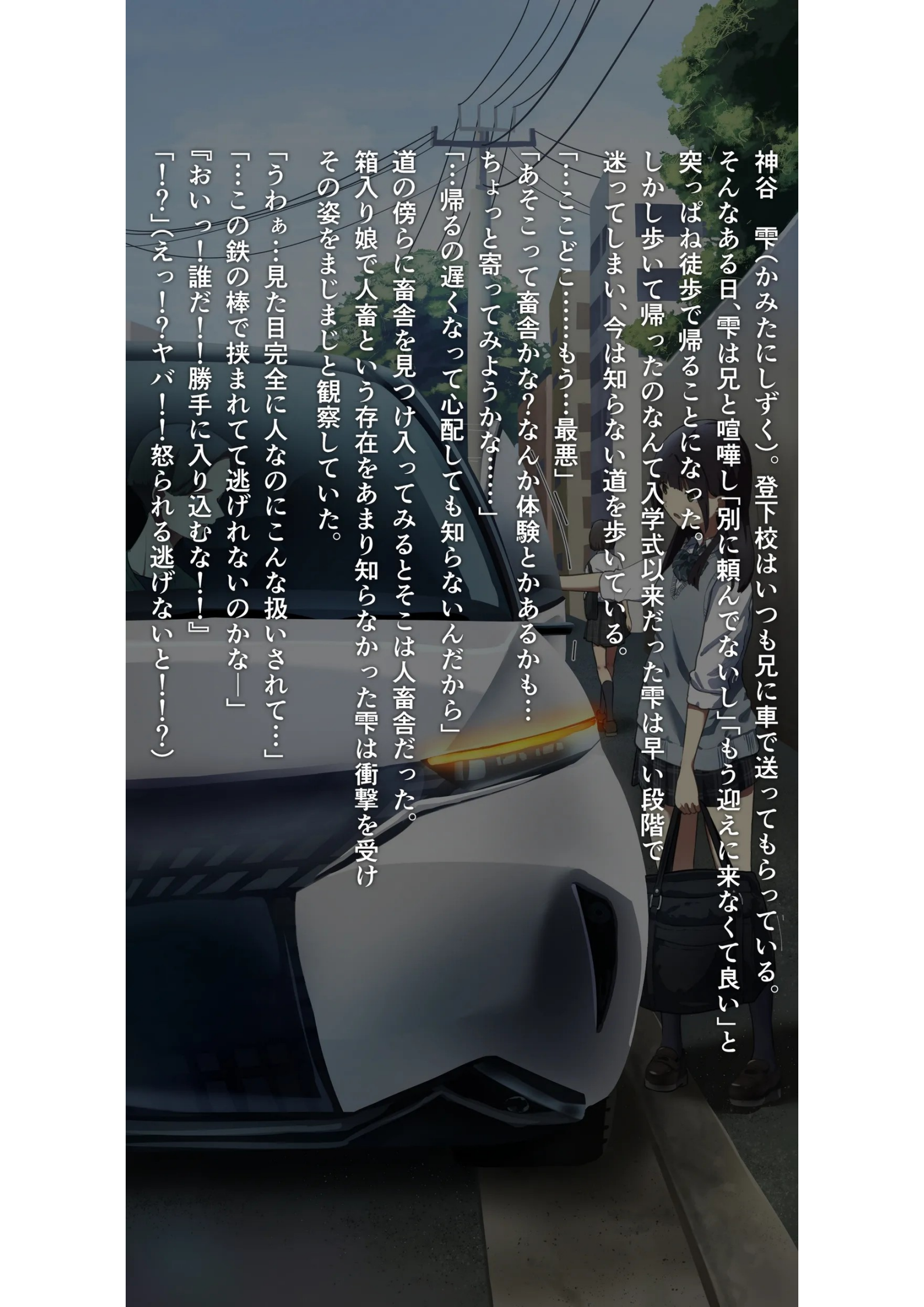


遅いよ
お兄ちゃん
もうちょい
早く来て

連絡見てから
来てるからな
これでもすぐ
家出たんだぞ
お前のために

はいはい
あんがとね

お前な！



神谷 雫（かみたにしずく）。登下校はいつも兄に車で送ってもらっている。そんなある日、雫は兄と喧嘩し「別に頼んでないし」「もう迎えに来なくて良い」と突っぱね徒歩で帰ることになった。しかし歩いて帰ったのなんて入学式以来だった雫は早い段階で迷ってしまい、今は知らない道を歩いている。

「……ここどこ……もう……最悪」

「あそこって畜舎かな？なんか体験とかあるかも……ちよっと寄ってみようかな……」

「……帰るの遅くなって心配しても知らないんだから」

道の傍らに畜舎を見つけ入ってみるとそこは人畜舎だった。箱入り娘で人畜という存在をあまり知らなかった雫は衝撃を受けその姿をまじまじと観察していた。

「うわあ……見た目完全に人なのにこんな扱いされて……」

「……この鉄の棒で挟まれてて逃げれないのかなー」

『おいっ！誰だ！！勝手に入り込むな！！』

「！？」（えっ！？ヤバ！！怒られる逃げないと！！？）

待てっ!!
おいこら
逃げんなっ
!!

Aッ

Aッ

Aッ

Aッ

こっこわ...!?
捕まったら
やばい...
.....!!

ハア



畜舎の奥まで逃げこんできた雫だが奥の扉は古く錆びついていて動かなかった。

「なっ何で……!? どうしよ……あっ……でも……しっしょうがない……!」

雫は人畜の入っていない柵をつけると一瞬迷ったが、着ていた服や靴を脱ぎ鞆につめると換気口から外に投げ捨てた。全裸になった雫は柵に入り他の人畜と同じように四つん這いになり、見事にこの畜舎の人畜に成りすました。
遅れてやって来た作業員は

「ハァハァ……くそ……ハァハァ……全く……逃げ足の速いガキが……」

雫の作戦通り奥の扉から逃げたと勘違いした作業員は息を切らしながら諦め戻っていく。

(うまくいった……裸で恥ずかしいけど人畜だと思ってるからそんなに見ないよね……)

『ん……閉め忘れてたか』ガチャンツツ

「うぎっツッ!?」(!? のっ喉が……!)

戻っていく途中で、ロックがかかりきつてない柵を見つけた作業員はその人畜を踏みながら勢いよくレバーを下げしつかりと人畜にロックを施した。

痛い……こつ
声が出な……

………！

あつあれっ！？？

全然動かない！！？

こ……このぐらい……ツツ！！

嘘……ちよつと……！

戻ってきてよ！これっ自分じゃ

外せないの……！？？

私ずつとこのまま！？

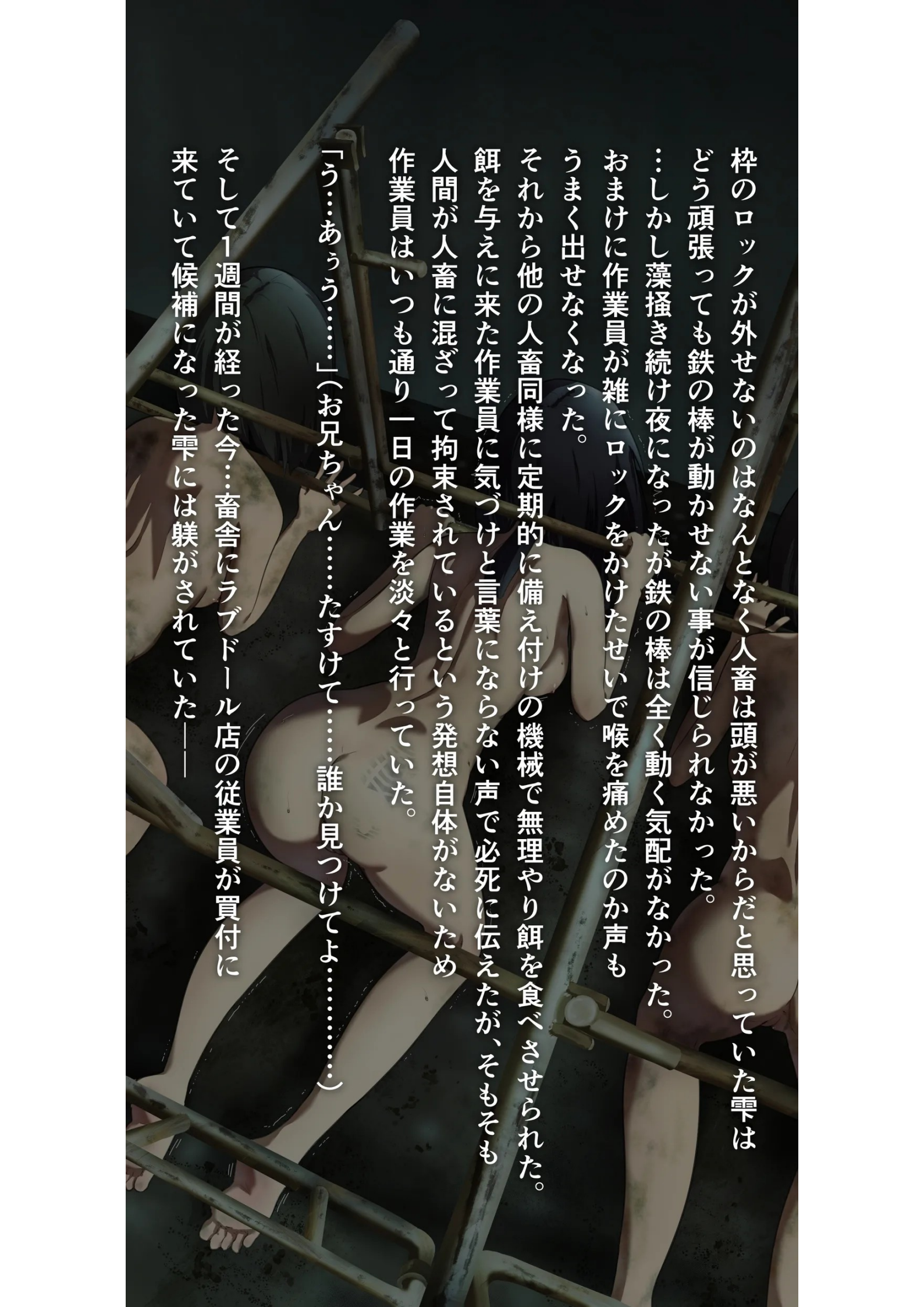
人間なのに……

ここの人畜じゃないのに……

う……あ……あつい……

うっ……
え……
……！？





枠のロックが外せないのはなんとなく人畜は頭が悪いからだと思っていた雫は
どう頑張っても鉄の棒が動かせない事が信じられなかった。

：しかし藻掻き続け夜になったが鉄の棒は全く動く気配がなかった。

おまけに作業員が雑にロックをかけたせいで喉を痛めたのか声も
うまく出せなくなった。

それから他の人畜同様に定期的に備え付けの機械で無理やり餌を食べさせられた。
餌を与えに来た作業員に気づけと言葉にならない声で必死に伝えたが、そもそも
人間が人畜に混ざって拘束されているという発想自体がないため
作業員はいつも通り一日の作業を淡々と行っていた。

「う…あうう…」（お兄ちゃん……たすけて……誰か見つけてよ……）

そして1週間が経った今…畜舎にラブドール店の従業員が買付に
来ていて候補になった雫には躡がされていた――

こいつは見た目も
良いですし
ラブドールには
ちょうど良いと
思いますよ！

餌やる度によく
鳴きますが…
騾棒で長時間調教
すりやすすぐ
大人しくなると
思いますっ

ですねーじゃあ
この子も
お願いします。

毎度ありっ
ありがとさん！

ラブドール!!?
騾棒ってなにいい
いいいいいいいい
痛だいいだいいだ
う痛だだだ
だだだだ!??

あーっ
あーっ
あーっ

